

論文執筆の極意

学習ノート
長谷川明弘

1

研究の世界の「心・技・体」

- 心
 - 研究に赴く姿勢
- 技
 - 調査・分析・考察など一連の論文文化作業で必要となる個々のスキル
- 体
 - 研究者としての研究発表や論文発表の経験的蓄積

2

目次

- アイデアの産み方
- 文献・資料について・論文とは
- 研究とは・共同研究のために
- 読み方
- 書き方
- 参考・引用文献

3

論文執筆の全過程

1. 文献を集める
2. 文献を批判的に読む
3. 新しいアイデア・主張が生まれる
4. その主張について論文を書く
5. 論文を投稿する

4

優れた論文を作成する過程・研究のポイント

- 考え方
 - 着眼点・発想法
- データとのつき合い方
 - 材料の集め方
 - 整理法
- 文章作成
 - 構成力
 - 説得術
- 発表
 - 論文
 - 口頭発表・パワーポイント
 - 図・表
 - 議論の仕方

5

アイデアの産み方

6

アイデアの作られる全過程・方法

ジェームス・W・ヤング 「アイデアのつくり方」

1. 資料を集める
2. 資料を心の中で加工する
3. 資料を咀嚼する
4. アイデアが生まれる
5. アイデアを具体化・現実適応・展開する

7

資料を集める

アイデアの作られる全過程・方法 第1段階

- 当面の課題のための資料(特殊知識)
 - 特殊知識とは、専門論文などである
 1. 項目をカードを作成して記録すると良い
 2. カードを分類できる
 3. 最終的にあらゆる項目を網羅したファイルボックスになる
- 一般的知識を蓄えるための資料
 - 一般的知識とは、小説や音楽、絵画など芸術作品に触れることで養うこともできる。日々のニュースや自ら体験することからも抽出できる。人生のすべての事象
 - スクラップブックを作成することをすすめている

8

資料を心の中で加工する

アイデアの作られる全過程・方法 第2段階

- 資料と資料の関係を探す
 - 集めた資料にひとつひとつ触れる
 - ひとつの事実を取り上げる
 - 様々な観点から資料を読み込む
 - 2つの事実を一緒に並べて、噛み合うか調べる
 - 事実の意味に耳を傾ける
- 部分的なアイデアが生まれたら書き留める
 - カードに書き込むなどすることが息詰まったら次の段階に移る兆し

9

資料を咀嚼する

アイデアの作られる全過程・方法 第3段階

- 直接は努力をしないで待つ
- まずは課題を忘れる
- 意識の外に出す
- 勝手に無意識が働くのを待つ
- 無意識を刺激する
 - 想像力や感情を刺激するものに心移す
 - 音楽鑑賞、観劇、映画鑑賞、小説など

10

アイデアが生まれる

アイデアの作られる全過程・方法 第4段階

- アイデアを求める緊張状態から解放されたときにー
- 突然アイデアが訪れる
- アイデアが突然生まれるように感じる
- **メモを忘れないこと**

11

アイデアを具体化・現実適応・展開

アイデアの作られる全過程・方法 第5段階

- 生まれたアイデアを現実場面に適用できるようにする
 - 多くのアイデアが陽の目を見ないこともある
- 理解ある人々の批判を仰ぐ
 - 良いアイデアは自分で成長していく
 - 人々を刺激するので、良いアイデアならば、自分で見落として部分に手を貸してくれる

12

既存の要素の再構築過程

- アイデアとは
 - 既存の要素の新しい組み合わせでしかない
- 新しい組み合わせを作り出すには
 - 事物と事実間の関連性を探ること
ジェームス・W・ヤング「アイデアのつくり方」
- 身につけてきた知識を組み直すこと
 - I. 情報収集する
 - II. 知識を蓄える
 1. 左脳を通過させる。左脳は、情報に意味づけをする働き
 2. 一旦入力された情報を「言葉にする」ことで意味づけできる
 - III. 蓄えた情報を要素に分解
 - IV. 新しい要素と組み合わせる
 1. 左脳に蓄えられた情報が増えると右脳に情報が自然に移される
 2. 右脳で要素と要素が組み合わせられてアイデアがひらめく
 - V. 新しい事柄になる
 1. ひらめきを「言葉にする」ことでアイデアが自覚できる
 2. ひらめいたらメモに残す

13

考えがまとまってからの手続き 「あたためる」

- 考えが一つになるまでいろいろとする
 - ノートに箇条書き
 - KJ法の図形
 - 図表
 - 落書きを見ながら講義をするようにして録音して聞き直す
- 他者に理解してもらうための戦略を練る
 - 知的レベルと情動的レベル

14

研究とは

臨床心理学における研究の意義

1. 臨床実践の中で生じた疑問・発見
 2. 研究によって一般化
 - 個別性から一般化へ
 - 守秘義務と情報公開(説明責任)
 3. 発表・教育によって他の専門家と共有することで貢献
- 臨床心理学は実践科学をモデルにして発展
 - 実践科学は、自然科学でもなく人文科学でもない
 - 実践科学の要素
 - 対象性
 - 関与性
 - 関係性
 - 個別性

15

16

研究に求められること

- feasibility(実現可能性)
- 言語化
- 客体化
- 概念化
- 抽象化

17

創造性とは

抽象性(概念)+具体化(検証)

- concept
 - 概念;思想;発想(conception)
 - 構想されたもの;構成概念(construct)
- vision
 - 将来を見越すこと[力],見通し,先見(の明);洞察力,想像力
- feasibility
 - 実現可能性
- concretion
 - 具体[実体]化,具象作用;具体性

18

研究とは

- I. 論文の収集
- II. 論文を熟読
- III. 研究計画を立案
- IV. 実験や調査を実施
- V. 論文としてまとめる
- VI. 論文を発表する

19

研究の世界で行われていること

- 研究成果の
 - 交流と共有化
 - 提案と普及
- 研究テーマ
 - 注目されている主題
 - 明らかになったこと
 - 誤っていたこと

公認の手順が重要

20

共有化を意図した 研究成果へのアプローチ

1. 研究成果への接触

2. 研究成果の内容チェック

3. 研究成果の発信

21

1. 研究成果への接触

共有化を意図した研究成果へのアプローチ

• 文献検索と入手

- 抄録を通読し、必要な文献を選定
- 研究方法の理解と活用能力
- 専門用語の理解
- 研究成果の到達点を把握
- 研究成果の課題と問題点の把握

22

2. 研究成果の内容チェック

共有化を意図した研究成果へのアプローチ

- 関連研究群の中に、これから着手する研究計画を位置づける
- 着手する研究と先行研究の相互関係を規定
- 研究を実施
- 実施した研究結果と先行研究との相互関係を再点検

23

3. 研究成果へ発信

共有化を意図した研究成果へのアプローチ

- 研究の位置づけ、手続きや結果を正確に記述。文献には、掲載学術資料・論文の確定
- 成果を発表する
- 発表した成果について学会や類似領域の研究者、発表後に判明した他の研究成果からのフィードバックに基づき、次の研究計画を立案

24

研究の類型

独創性とは

- データや理論の実証-実証研究
- 先行研究の追試-再チェック
- 時代差チェック-コホート差
- 地域差(国内間、国別)を検討-異文化で一般化
- 異領域への拡張-別領域、別ジャンルで一般化
- 条件の拡張-同一パラダイム内で一般化
- 適用年齢の拡張-対象年齢を一般化
- 実証研究の統合-知見の矛盾を実証的に解消
- 技術的な改良-新技術によりチェック

25

臨床心理学研究の進め方

1. 問題意識が芽生える
 - 臨床実践での疑問が生じる
 - 新しい方法の手応えがある
2. 文献を集めて読む
 - 文献を読んでは臨床実践を続ける
 - 問題意識が明確化してくる
3. 研究計画を立てて実施する
 - 先行研究の中でどこに位置づけられるのかを明確にする
 - データを集める
4. 研究結果を分析する
5. 研究成果を共有する
 - 口頭発表
 - 学会誌への投稿

26

臨床心理学研究

大まかに二類型に分類

- 量的研究
 - 質問紙調査
- 質的研究
 - 事例研究(case study)
 - a case method for teaching / training
 - a case study for assessment / planning
 - a case study for research
 - グランド・セオリー・アプローチ
 - 内容分析
 - エスノグラフィー
 - 現象学的方法
 - ナラティブ・アプローチ
 - アクションリサーチ

27

文献収集の目的

- 研究テーマの学問的な位置づけ(mapping)をすること

概論書、展望論文(review paper)

心理学評論、教育心理学年報、児童心理学の進歩
Psychological Review, Psychological Bulletin,
Annual Review of Psychology
国立情報センターの電子図書館サービス
アメリカ心理学会のPsycINFO

28

研究のアウトライン(研究計画)

A4サイズから始める

- 研究(案)
- タイトル
- 目的・意義(研究背景)
- 方法と仮説
- 調査対象
- 調査予定時期
- 調査項目
- 分析手法

29

論文とは

30

論文とは何か

1. 明確な問いを提示している「? どうして」がある
 2. それに対して以下のような形で答えるものである
「!!! わかった、これだ」という結論がある
- 説明的書き物
 - 論証的書き物
 - 何か
 - なぜか
 - AはBか
 - CはいかにBとなったか
 - Zを生み出すためにどうすべきか

31

科学論文とは

- 読者が必要とする情報のみを、過不足なく伝達できるように作られた論文形式
- 疑問を一つも持たせないまま、一貫性を保ったまま論文の最後まで読者に読まれることが望ましい
- 読者は専門家
 - パラダイム(理論枠組)とジャーゴン(専門用語)
- × ……してみよう、…であろうか…である、…であろう
- ○ ……である 断言した表現を心掛ける
- 主役は、仮説とその検証。データはその検証のための材料

cf.調査報告書の主役は、データである

32

科学論文の種類

- 研究誌・・・紀要(bulletin)、学会誌
 - 原著論文(original article / original scientific papers)
 - 研究報告(research and practice / short communications)
 - 資料・短報(brief report / short report / research note)
 - 予報・速報(provisional communications, preliminary notes)
 - 展望論文・総説(review article/ subject review articles)
 - 論壇(Sounding Board)
 - 解説・紹介(commentary)

33

学術論文と依頼論文

科学論文の種類

- 学術論文
 - 複数の専門家が目を通して「査読」を経た論文
 - 信頼性が高い
 - 一定水準の質が保証される
 - 雑誌の分類・位置づけや投稿規定を読んで判断できる
- 依頼論文
 - 編集部から依頼された論文
 - 独自性を有する場合がある
 - 臨床的な有用性を持つなど
 - 信頼性が高くない場合がある

34

よい論文とは 何を言おうとしているのかが一目瞭然

- 統一(unity)
 - 主要な問い(主問)が全体を貫いていること
 - 連関(coherence)
 - 主要な問いがいくつかの副問に分かれていて、相互につながっていること
 - 展開(development)
 - 主問、副問に対する答えが十分に問われ、答えとしても十分に言い尽くされていること
 - 明確性(clarity)
 - 読者が論旨をつかみやすいこと
- 他領域の研究者が使える図式や汎用性を持っていること

35

考える習慣を身につけること

- 広い分野にわたる基礎事実や情報を集める
- 偶然目にした現象、情報について
 - 大まかな話の筋
 - 原理的、本質的、根本的なものと関連させて考える習慣を持つこと

36

論文の独創性

- 口頭発表した研究を論文として発表することは許されている
- 印刷公刊する際の注意
 - 一度印刷公刊された論文と同じ内容のものを他の学会誌に投稿することは許可されない
 - 実質的に同じ論文を同時に2つの雑誌に投稿することは許可されない
 - 研究の要点を予報・速報として印刷公刊した後、詳細を原著論文として発表することは認められる

37

読み方

38

文献を読んでどうするのか？

1. トピックについてより深く知ること、自分の漠然とした問題意識を明確な形にする
2. 先行研究を踏まえてよりつっこんだ問題を立て直す
3. 先行研究の不備を補うような研究を新たに構想する
4. データの集め方、分析の仕方についても先行研究は重要な情報源になる。自分がやろうとしている分野ではどういう手法が主にとられているか、そしてその手法を使う際にどういうことに注意すべきか、といったことは先行研究をみていく内にわかってくることである。

39

文献・資料とは

- 文献(literature)とは研究用の書物や文書
 - 基本文献は何度も利用するので手元に置くこと
 - 関連文献も集まっていくので時々整理すること
- 資料(materials)とは研究用の基礎材料
 - 実験・調査のデータ
 - 一次資料は、素データのこと。
 - 二次資料は、資料を基に解釈が交えてあるもの

40

重要度による文献の分類

1. 読みたい文献
2. 読まねばならない文献
3. チェックしておく文献
4. 触れたくない文献
5. まったく触れない文献

41

テーマを決めていく

- 文献・資料を何か読んでいけば「問題意識」が芽生える
 - 広く漠然としたものから絞り込まれていく
 - 入門書を探して、そこから読み始める
- 文献・資料を読んでいく内にテーマが変わっていくこともある
 - テーマが変わる場合は、何をきっかけに変わったのかを把握しておくこと

42

問題の立て方

- 未解決なまま現在に至った問題に取り組む
 - これは「天才」が解決してきた。
- これまで誰も設定しなかった問題に取り組む
 - これまでの蓄積に新しい考えが加えられることが研究では多い
 - 他と比較できるだけの知識を持っていることが前提
 - 知識を持つことはつまり、その領域の構造を把握することになる。領域の構造把握には入門書・概説書を読むこと
 - 専門領域を固定させないことが大切である
 - 共通した方法論を掴むことも大切

43

問題の見つけ方

- 興味・関心を羅列する
- 文献を報告させること
- 比較(差違)の前に類似性を掴むこと
 - a)縦にみる。背景・歴史に目を向けさせる
 - b)横にみる。他の領域で探す
- 差違と類似を再度まとめさせる
- 文献に再度あたり、これまで報告されていないかを確認する

44

文献選びのステップ

- STEP 1. 目次をみる
- STEP 2. 引用・参考文献をみる
- STEP 3. 著者の所属・現職をみる
- STEP 4. まえがき, あとがきを読む
- STEP 5. 斜め読みをする
- STEP 6. 興味深いところを読み込む
- STEP 7. 入手するか検討する

45

STEP 1. 目次をみる

- 目次にさっと目を通す。
- 「どういう論旨なのか」が適度にわかること。

46

STEP 2. 引用・参考文献をみる

- 心理学では反論的に引用されることはあまりない
- 引用・参考文献は, その著者の世界観・世俗観をストレートに表しているともいえる

47

STEP 3. 著者の所属・現職をみる

- これもSTEP 2.と同じこと
- 著者がどういう位置にいて, この本がどういう位置にあるのかを確認する
- たとえば, 超難関大学の博士課程を出ているのに地方の名もない私大に行っていたら, 「偏屈もので, 根性は曲がっているに違いない」などと考えることもある

48

STEP 4. まえがき, あとがきを読む

- ようやく「読み」をする
- 内容のすべてを語っていることもある
- ここまでの作業は, 文脈(社会状況含む)を読むこと
- 著者, 学説, 学派, テーマ等々をも文脈として理解すること
- 「構成」を読む力をつけること(目次を読むのと繋がる)
 - 全体の構成と各章の構成など, 入れ子細工のように, つながっているところもある
 - 1章は重要なこと, そしてなおかつ, 基本的なことが語られていることが多い。しっかりと読んでおくこと

49

STEP 5. 斜め読みをする

- パラパラとめくること
- 興味のあるキーワードなんかにはふと目がいくことになる

50

STEP 6. 興味深いところを読み込む

- 大事なところは, しっかりと読む
- 興味がなければ読み飛ばす
 - 仕事上の必読書だったらできない
 - 全ページめくると, そこそこの情報になるもの

51

STEP 7. 入手するか検討する

- 目次を読み, まえがき・あとがきを読み, 著者の位置づけがちゃんとできていれば, 読み飛ばすだけでも結構わかるもの
- あとで欲しいと思ったときに, 文献が入手困難になっていることがある
 - 「買う」→(経費で)
 - 「もらう」→(献本で)
 - 「ときどき買う」→(自腹で)
 - 「(複数の)図書館に希望を出す」

52

タイトル

批判的読み方(critical reading)

- 何を問題として、
- どのような被験者に、
- どのような研究方法を使ったのか推測
- 問題の内容をより詳細に推測
- 引用されている論文を推測
- どのような論理で何が問題とされるのか読み込む
- 自分が論文を書くのならどのように書くのか考える

53

問題

批判的読み方(critical reading)

問題を読み、読むことをストップ

- タイトルを読んだときの推測と照合
 - 予想した研究が引用されていたか
 - 問題の論理は納得できるものだったか
 - 仮説や予測は妥当であったか
 - 自分が予測した問題の展開と実際の論文の展開の類似点と相違点
- 書かれている問題意識や仮説をもとに、自分なりに方法を推測して書き出す。
被験者数と属性、手続き、分析法など

54

方法

批判的読み方(critical reading)

方法を読み、読むことをストップ

- 問題を読んだときの推測と照合
 - 推測した被験者、手続き、測度と読んだ論文のやり方と比較。
 - 考えていなかった条件群、分析手法の採用
 - どちらがなぜ良いのかを書き留めておく。
- この方法で、得られる結果の予想
 - 仮説通りか、結果はグラフに描けるか

55

結果

批判的読み方(critical reading)

結果を読み、読むことをストップ

- 方法を読んだときの推測と照合
 - 分析法の一致か否か
 - グラフ表現は推測と実際のどちらが適切か
- 結果の中で、最も重要なところはどこか
 - 著者が立てた仮説や予測と一致していたか否か
 - 一致していた場合、自分ならどのような結論を出すか
 - 結果が予測と異なった場合、不一致の理由をどのように説明するか
 - 結果からは何が言えないのか(研究の限界)

56

考察

批判的読み方(critical reading)

考察を読み、読むことをストップ

- 結果を読んだときの推測と対比
 - 自分が推測した視点とは異なる考察がなされているか
 - 自分が指摘した重要な観点を著者が見落としていないか

57

全体をみなおす

批判的読み方(critical reading)

論文全体を読み、振り返る

- この研究をはじめから発展させるとしたら
 - 問題と目的、方法、予測される結果をノートにまとめておく

58

書き方

締め切りと量を決める

- 締め切り日を決めると、それに合わせて作業が進められる
- 期限がないといつまでもダラダラと作業が続き、結局完成しないことがある
- 原稿量も、決めておかないとまとまりのない論文になってしまう
- 論文構成を練る(アウトラインを決める)ことに7割のエネルギー(その中には情報収集の時間を3割程度充て、メインメッセージを作り、キーライン、サポートとの関係を同時に考える)を使うつもりで臨むこと
- 文章やプレゼンテーションのメッセージ作りには3割を充てる

59

60

執筆にあたって

- 正確さ
- 明瞭性
- 簡潔性
- わかりやすさ
- 論理性

61

論旨(アウトライン)の立て方

- ◆ 方法1: 話の筋道を明確にする
 - thesis(論題, 陳述, 論旨, 論点, 主張)を決める
 - 書く目的とそこから主張したいことをひとつの文にする
 - 途中で見直してthesisが修正されることがある
- ◆ 方法2: 考えを羅列する
 - 言いたいポイントをリストアップする
 - ポイント同士の関連を構造化する
- ◆ 論文を構造的に組み立てる・構成を考える
 - 段落の順番を入れ替える・組み込む
- 幹線(メイントラック)
 - 論文を書こうと思った問題意識
 - 主問(major questions)
- 横道(サイドトラック)
 - 副問(minor questions)
 - 副問に答えていく内に、主問への答えが末尾で結ばれる

62

論文の構想の深め方

1. 序論10%
 - 興味を持ってもらって、正当性を裏付けて、予告を記す
 - 問題意識がしっかりある。仮説が立てられている
2. 本論80%程度
 - 小さな問いと回答に分割する。並列と連結の構成
 - コーパス(資料体)が適切に分類されている
3. 結論10%程度
 - 小さな回答を統合する。
 - 問題意識と対応した回答となっている
 - 図式化・汎用性ができるくらい明解である

63

論旨(アウトライン)を発展させる

論文を読んでいく内にアウトラインが固まっていく
アウトラインを必ず書き出す。書かないのは禁じ手

1. 萌芽的アウトライン(seminal outline)
 - トピック細分の段階
2. 暫定的アウトライン
 - 仮読み
 - 本読み
 - 資料集め
 - 資料批判
3. 最終的アウトライン

64

論旨(アウトライン)の構成

- 章 1.
 - 主 1.1.
 - 副 1.1.1. or 1.1.a:
 - 付き数字は機種依存文字
 - 列挙の場合には“1)”や“ア)”のような片カッコをつけて表現することが望ましい
 - 数字の表現は、カッコなし>両カッコ>片カッコの順でレベルが下がっていくことが一般的な使い方
 - レベル別の表現を自分なりに統一
 - 通常の文書では、アラビア数字を主とする。
 - ローマ数字の使用や変わったカッコの使用は控える。
 - 従
 - » 属
 - » 下

65

段落間のつながり

- 前の段落と別の側面を扱う場合
 - ところで
- 同格の議論を展開する場合
 - まず第1に、続いて第2に
 - さらに
 - 他方
 - 要するに
 - 例えば
 - この間
 - 同様に
 - この結果

66

論旨(アウトライン)の形態

- 事項見出しアウトライン・トピックアウトライン
 - 重要な軸を並べただけのアウトラインのこと
- センテンスアウトライン
 - 各項目を細かい文章にしたアウトラインのこと

67

事実と意見の区別

仮説と理論、法則の違い

- 事実は真偽のみ
 - 事実の記述
- 意見は複数の評価が存在する
 - 意見の記述

68

事実は真偽のみ

仮説と理論、法則の違い

- 客観的に真偽を確認できるもの
 - 自然に起こる現象や自然法則
 - 人間の関与した事象(某年某地にて出生)

69

事実の記述

- 記述すべき事実を吟味して書くこと
- 曖昧な表現にしないで明確に記述すること
- できるだけ名詞と動詞で記述すること
- 主観に依存する修飾語を排除すること
 - 「便利な」「すぐれた」という修飾語(句)は意見

70

意見は複数の評価が存在する

仮説と理論、法則の違い

- 推論(inference):前提に基づく推理の結論、中間的な結論
- 判断(judgment):あり方、内容、価値を見極めてまとめた考え
- 意見(opinion):上記の意味での推論や判断;自分なりに考え、感じて到達した結論の総称
- 確信(conviction):自分では疑問の余地がないと思っている意見
- 仮説(hypothesis):真偽は不明だが仮に打ち出した考えのこと
 - evidence(証拠・根拠) < proof(疑問の余地のない決定的な証拠)
- 理論(theory):仮説を吟味して証拠などを示して支持すれば理論になる。しかしながら全ての人が容認させるには至らない仮説のこと
 - 法則(low)は、全ての人が容認せざるを得ないほど十分な根拠のある理論のこと(法則は事実に含まれる)

71

意見の記述

- 断定形で記述すること
- 私は
 - 考える
 - 想定する
 - 推論する
 - 思う
 - 感じる
- 私(頭)をつけて足(と考えるなど)を忘れないこと
 - 上記を記載しないで中身のみ記述した場合に、読み手に事実と混同される場合がある
 - 例外的に意見の核となることばが主観に依存する修飾語(最良の、うまい、青っぽい)である場合は、頭と足を省略することが許される
 - それ以外は省略してはいけない

72

1.文は短く、 意味のまとまり毎に、句読点(、。)

- 意味のまとまりごとに、スムーズに「音読」できる長さが基本
- 1つの文章は、できるだけ短く簡潔に
 - 何が主語かを意識して書くこと
 - 主語と述語を一致させた文章を書くこと
 - 1つの主張を書くこと
 - 1つの事実のみにすること
 - 受動態で書かないこと
 - 二重否定で書かないこと

73

2.接続詞の使用を控えると歯切れ良い

- 接続詞「さらに、そして、また…」の使用は、できるだけ避ける
- 接続詞は、「ひらがな」で書いておくと読みやすくなる。
- 特に英語では、接続詞の多用は嫌われる

74

3.日本語では主語に注意

- 主語が人間の場合は、「主語」が無くても良い
- 人間以外のものである場合は、意味が通じなくなる人が多いので、要注意
- 一般に、日本語では「主語」をあまり用いない

75

4.修飾語-被修飾語という配列

- 基本は、文法に則した配列
修飾語-被修飾語の順序
- 修飾語(句)を置く位置は、修飾すべき語に密接させること
- 用言(単独で述語となりうるもの-動詞、形容詞、形容動詞など事物の動作、存在、性質、状態を記述して)を修飾する連用修飾語(英語でいう「目的語」や「補語」に相当する語句)は、どのように並べても意味は通じる
- 体言(主語となりうるもので、名詞や代名詞といった活用がないもの)を修飾する連体修飾語

76

論文の構成ー典型例

理解を促す構成が望ましい

- はじめに
 - 問題、研究背景、研究の意義、必要性、目的
- 主部
 - 方法
 - 再現できるよう丁寧に事実を正確に記述する
 - 結果
 - 事実を整理して簡潔に記述する
 - 考察
 - 結果に基づいて導かれたことを記述する
- まとめ
 - 主張したいことを要約
 - 研究で明らかになったことと、残された課題を記述する
- 謝辞
 - 原稿へのコメントをもらった指導者、協力者などへの謝辞を述べる。社交辞令での列記は避けること
- 文献

77

タイトル(title)

執筆にあたって

- 主題(キーワード)、心理的事象、説明理論
- 調査対象
- 方法
- 独立変数、従属変数

タイトルから推測できるように
場合によっては副題を付けてもよい

78

研究目的の背景

研究への心意気

- 研究目的の上位の目的を持って論文執筆に臨む
 - 形式的な「目的」ではない
- 研究を思い立った「志」を表現する
- どんな意図を持って取り組んでいるのか
 - 感じたこと
 - 考えたこと
 - 抱いた疑問
 - 問題点
- なぜ、この論文を認(したた)めたのか、目的の部分に理由の付け足しをして欲しい

79

問題(introduction)

執筆にあたって

1. 先行研究がどこまで明らかになっているか
 2. 先行研究では、何が不足しているか
 - 全ての研究には、実行可能性としてみると、必ず限界がある。
 - その限界を課題として整理してこれから実施する研究に取り込む
 3. 本研究がどのような意義があるのか、またどのような研究成果が期待できるのか
 - 直接関係のある論文(学術論文や単行著)をやや詳しく紹介しながら。学会発表、調査報告書、ホームページは原則照会不可
 4. 理論、定義をした上での研究の位置づけ
 - モデルを作る段階での仮定、理論展開で追加した仮定
 5. 研究の目的
 6. 予測や仮説について根拠を示しながら書く
 - 命題化されて明示的な仮説(explicit hypothesis)が望ましい
- 調べたことをすべて書くのではなく、簡潔に要領よく

80

先行研究

まとめ方からリサーチクエスチョンまで

1. 先行研究を収集する
2. 批判的に読み解く
 - 方法・考察から研究の良い点と不十分な点(課題)
 - 見逃している点はどんなところか
3. 研究の成果(方法・考察)の共通点と相違点から意味を見出す
 - 総括、並記すること。羅列は極力避ける
4. 意味の断片から物語を作る
5. 物語から中心テーマに絞る
6. リサーチクエスチョンを考え出す

81

先行研究のまとめ方

典型から展望論文まで

- 時系列でまとめること
 - 基本文献や必読文献について記述する
- これから着手する研究に最も近い研究について詳しく触れること
 - これまでの研究成果について記述すること
 - 何故これを取り上げるのか、どんな貢献をするのか記述
 - 未着手の研究課題について記述すること
 - どんな対象にどんなやり方で明らかにして考察していくのか記述すること。研究目的を書くこと
- 展望論文では、当該領域に関する全ての文献を網羅するつもりでまとめること

82

方法(method)

執筆にあたって

- 過去形で記載
 - 能動態で書くことが望ましい(前は受動態)
1. 被験者:属性、性別、人数、年齢(平均と年齢範囲)
 2. 実験(調査)時期と場所
 3. 装置・材料・課題:機器のメーカー、型番、刺激材料、教示した課題
 - 用いた教示はすべて書く(長い場合は、附録に)
 4. 手続き:測定・分析方法

83

結果(results, findings)

執筆にあたって

- 過去形で記載
- 主観や解釈を交えず、事実を明確に書く
- 図表を用いても良い
 - 表 線はなるべく少なく、横線のみにする。
小数点の位置と桁数をそろえること
- 測度の算出法、測定単位
- 小数点以下の有効数字を統一
 - 表の中の値がすべて1以下の場合、.52と0をつけない
- 検定 (eg1. $t_{(24)}=4.36$ $p<.01$)
(eg2. $F_{(2,24)}=6.36$ $p<.005$)

84

考察(discussion)

執筆にあたって

- 現在形で記載
 1. 簡単に結果をまとめる
 2. 著者の解釈、先行研究との比較、研究の限界、残された課題を論じる
- 妥当性-先行研究と照合
 - 一致点と不一致点を述べ、その要因を推測
- 限界性-一般性の限定
 - 仮説と照合し、明らかになった点、不明な点を分ける
- 可能性-今後の研究展開
 - 残された課題、改善点、研究の方向性

85

引用(quotation)

- 意義
 - 説明や解釈の際、読者の理解効果を高めたり説得力を増すため
- 留意点
 - 短く、少なくする。100字程度
 - 長い引用は本文から取り出す
 - 自分が書く文章の2割程度までにとどめること
 - 総説では、多くの関係のある論文を網羅する必要がある
 - 原著論文では、直接関係のある論文のみでよい
 - 私信は避ける。やむを得ない場合は、許可をもらうこと
 - 非公刊資料は引用に用いないこと
- 先行研究から結論や要旨、数式、データなどは公刊されたものである限り出所を明記すれば引用が自由である
- 図面や写真の場合は、著作権者に許可を得ること。
 - 依頼状を書いて書面で返事をもらうことが望ましい

86

personal communication

私信

- 文献は、刊行資料を用いるのが基本原則
- 特別な事情として「私信」を用いることがある
 - 電子メール・手紙
 - 学会発表
 - 座長、助言者フロアからのコメント

87

Web情報・新聞の引用

- 学術的な資料とは成り得ない
- 手元の資料として保存しておくこと
- 下記の項目を明記すること
- Web情報
 - 年月日
 - アドレス
- 新聞
 - 年月日
 - 発行地域(例:東海版)

88

索引

- 著書には索引をつけることが望ましい
 - 事項索引
 - 人名索引
 - 書名索引
- 索引がない場合は
 - 目次を詳しくする
 - 巻末に文献目録をつける
- なお論文には索引を付けない

89

謝辞

- 指導あるいは援助に対する感謝の言葉
- 感謝する内容を明記
 - 指導面、資金面、アイデア面など
- 名前を挙げられる人に了解を得ること
 - 名前があると責任を伴うため
- 科学研究費では、発表の謝辞に明記する必要がある

90

要約・抄録

- 論文の内容と結論を簡潔に書き、論文内の新しい知見に言及するように努める必要がある。
 - 理論、実験、定性的、定量的といった側面がわかるように
 - 実験や計算の具体的な方法と結果を記述すること
- 同じ分野の専門家は、論文を吟味する前の材料にする
- 関連分野の専門家は、要領を得るために読む
- 抄録雑誌は、情報提供サービスをそのまま転載する場合がある

91

図・表

- 図と表には番号を付ける
 - 図にはアラビア数字が多い
 - 表にはローマ数字が多い投稿先の規定に従うこと
- 説明(caption, legend)を書くこと
 - 本文を読まなくても理解できるように書く
 - 図では、図の下に書くのが原則
 - 表では、表の上に書くのが原則

92

文献表(bibliography)

93

論文の点検

- 単語や言い回し
 - 「ほぼ」、「ぐらい」、「らしい」等と書くことが必要か否かを吟味
 - 能動態でできるだけ書いてあるか
- 難解でないか
- 形容詞が不必要であったり先入観を示さないか
- 動詞は、正確、適当か
- 文の途中で主語が変わっていないか
- 代名詞は、何を指しているか明確か
- 文章が長すぎないか・削れるところはないか
- 段落の位置、切り方は適当か・表題、節の分け方、節名
- 研究指導者や先輩知人に点検を依頼できるとよい
 - 引がかかった読みにくい箇所、冗長と感じた箇所を指摘してもらう
- 点検を依頼できない場合は1ヶ月ほど寝かすとよい

94

文献・資料を外す勇気を

Personal Communication=私信と新聞記事・WEB

- 論文を書いていく中で論理展開が行き詰まることある
- そんな場合は、次の「研究の種」としてせっかく集めた文献・資料であるが書いている論文から外すこと
- Personal Communication=私信は特別な事情の場合のみ
 - 手紙、電子メール
 - 座長、助言者、フロアーからのコメント
- 新聞記事・WEBは学術資料ではない
 - やむを得ず引用する場合は
 - WEB情報は、年月日とアドレス
 - 新聞は、年月日と発刊地域

95

学会

96

学会とは

専門家と議論したり研究成果を広報する場所

- 学会という言葉には、
 - 学術団体と学会発表の意味がある
- 参加・入会しての利点
 - 検証結果の正しさを議論できる
 - 検証方法の妥当性について検討できる
 - 検証内容を周知させることができる
 - 最近の研究動向をしる・他の研究成果を知る

97

学会発表の仕方 年に1、2回開催される

- ポスター発表
 - 掲示板にポスターを貼って、一定の時間滞在して、研究を説明する。1対1なので深い議論も可能である。不在の時のために、見るだけでもわかるようなポスターの制作が大切になる。
- 口頭発表
 - 講義形式で多人数に向けて説明する。時間制限の中で要点を押さえた説明が求められる。多くの人に知ってもらう機会になる。

98

参考・引用文献

- 大野木裕明・中澤潤(編・著) 2002 心理学マニュアル 研究法レッスン 北大路書房
- 小河原誠 1996 読み書きの技法 ちくま新書
- 澤田昭夫 1977 論文の書き方 講談社学術文庫
- 澤田昭夫 1983 論文のレトリック わかりやすいまとめ方 講談社学術文庫
- 島内景二 1995 読む技法・書く技法 講談社現代新書
- 理科系の作文技術 木下是雄 1981 中公新書
- あだち けんじろう『一日一問 英文ユース』～毎日 コツコツ ゆっくりと!～
- 西村克己 2002 図解する思考法 日本実業出版社
- 古谷野亘 2005 研究成果を学会誌に発表する方法₉₉ 老年社会科学,26(4),p.487-495

参考・引用文献

- 「超」整理法 野口悠紀雄 1993 中公新書
- 続「超」整理法・時間編 野口悠紀雄 1995 中公新書
- 「超」勉強法 実践編 野口悠紀雄 1997 講談社
- 「超」整理法3 とりあえず捨てる技術 野口悠紀雄 1999 中公新書
- 知的生産の技術 梅棹忠夫 1969 岩波新書
- 考える技術・書く技術 板坂元 1973 講談社現代新書
- 続 考える技術・書く技術 板坂元 1977 講談社現代新書
- 「考える力」をつける本 新聞・本の読み方から発想の技術まで 轡田隆史 1997 三笠書房
- 「考える力」をつける本2 「自分の考え」をどう深め、どう実践するか 轡田隆史 1997 三笠書房
- 「考える力」をつける本3 これが「思考」を強化する最終ステップ 轡田隆史 1998 三笠書房

100